

ビジネス法学科ジャーナル

第9号

「編集発行」 大阪経済大学 経営学部 〒533-8533 大阪市東淀川区大隅2-2-8 6/15 発行
 経営・ビジネス法センター TEL 06-6328-2431(代表)E-mail:blic@osaka-ue.ac.jp

<新入生へ贈る言葉>

新入生の皆さん。大学生活も約3カ月過ぎつつありますが、大学の居心地はいかがですか？この時期に、敢えて不肖私から老婆心ながら、いくつか皆さんの耳に入れさせてください。参考にする or しないは、むろん皆さんの勝手ですが・・・4点あります。

- ① 果報は寝て待つな
- ② 友人をつくることは基本的に困難で、努力しないとできない。
- ③ 「人と同じことをする」のを恐れよ
- ④ 「愛されること」よりも「愛すること」が大事。

①は、「果報は寝て待つ」という格言の否定です。その意味するところは、幸福は運によるもので、人の力ではどうにもならず、自然にやってくるのを気長に待つのがよいということへの反論です。私のこれまでの人生で「寝て待つて果報」があったためしはありません。皆さんは、自分から積極的に「幸福」を取りにいきましょう。

②については、私も友人は決して多くありませんが、現在付き合いのある友人は、いつの時期も努力してお互い分かり合えた結果から得られたものです。何となし気が合って付き合いだした・・・知らない間に、疎遠になり付き合いがなくなった、という例の方が多いと思われます。友人をつくることは、自分を認め理解してくれる人をつくることではないでしょうか。それは、付き合い上での「困難さ」を克服した結果だと思います。真の友人は、大学時代につけてください。



大阪経済大学 経営学部部長

井形 浩治(いがた こうじ)

CONTENTS

「新入生へ贈る言葉」	—井形経営学部部長—	P1~P2
「在校生へ贈る言葉」	—井形経営学部部長—	P2
「ゼミ紹介」		P3~P7
「法がぶつかるビジネスシーン第3回」	—東裕—	P8~P10
「新聞の読み方入門第5回」	—樋口克次—	P11~P13
「二宮正司先生退職の言葉」	—二宮正司—	P14~P15
「新任教員紹介」		P16
「広告」		P17
「学生寄稿小説」		P18~P20
「編集後記」		P21

③は、昨今の時代を考えてみてください。「東日本大震災」とそれに続く原発の放射能問題、さらにそれに続く関連企業・事業の停滞・衰退・・・我々が社会へ出るときの状況はいかがでしょう。私の大学時代、今から20数年前は、「まあまあ真面目な部類の学生」と評されれば、成績が下位1割未満の者でも、どこかの会社に就職でき「そこそこ出世」して楽しい人生が送れるもの、と考えられてきました。現在、各大学の就職率が60～70%という状況は、「まあまあ真面目な部類の学生」であっても全員は就職できないこととなります。ましては、成績下位1割未満の方はかなり苦しいはず。友人の横に座り、講義中私語を止められない、友人と連れ立ち簡単にゼミを休む・・・君や君の友人は、これからの社会のどの部分で活躍できる人材でしょうか。怠け者の友人と同じことをする必要はありません。君だけが自分を生き残れるような努力が必要です。④は、誤解しないでください。異性のみを想定しないでください。「愛すること・もの」は、いろいろあります。自分にとって必要な友人、家族、経大という大学、皆さんの職業意識、そして皆さん自身・・・です。「愛せないこと」は不幸ですし、「次なるチャンス」を得られません。

以上、役立たないかも知れませんが、参考までに・・・

<在学生へ贈る言葉>

在学生の皆さん。皆さんは、経大で1年以上「学生」(＝「学」んで「生」きること)をされてきました。経大は、皆さんに何か与えましたか？皆さんは、経大から何かを得ましたか？経大に限らず、「大学」という「人物」は存在しません。我々教員も職員も、それぞれ「井形」、「池島」、「吉野」(ここでは我々3人がたまたま「学部執行部」という職責にあるだけの例です)という名を持つ教員だけで、皆さんと大学の教室という空間で一定時間、「講義」、「ゼミ」等で時間を共有するだけです。

大学という「舞台」の主役は誰ですか？我々教員・職員は、それぞれが多少「年期の入った」名俳優・名女優ですが、残念ながら「脇役」であり、いいところ「準主役」が出来るのが関の山です。主役は、学生である皆さんです。「一流大学」とは、どのような大学

でしょう？優れた先生・研究者がいる大学？歴史伝統がある大学？知名度の高い大学？いわゆる「入学偏差値の高い」大学？・・・いずれも程度の差はあるものの当たっていますが、「的中」とは言えません。

「一流大学」とは、「一流」の「大学生」のいる大学です。皆さんは、「一流」の「大学生」ですか？もしくは、そうなるための努力を今現在されていらっしゃるでしょうか？

しかし、2011年現在の「一流の大学生」にはどのようなことが求められるのでしょうか？

私は、「一流の大学生」とはありきたりと思うのですが、少し背伸びしてでも難解な本を読み続ける学生と思います。ネット情報は、便利なまでに氾濫していますが、残念ながら限界があります。「活字」こそが「思考」・「思索」を生み出す唯一のツールと考えます。

私がこれまで読んだ本の中に、次のような言葉が書かれてありました。

「10代で読む本がその人の一生を決める。」

私の経験でもありますが、私が大学教員の道を歩み始めたのは、当時の私のゼミ指導教官から指示された本を読んでからです。ちなみに、その本はエーリック・フロム著、佐野 哲郎訳『生きるということ』(紀伊国屋書店、1980年)でした。10代は、むしろ一つの区分ですので、それは20代前半でもかまいません。要は、社会人になる前に、必要だということです。それは紛れもなく「一流大学生」の「大学時代」に求められる要件でしょう。

ただし、上に挙げた本は、私には理解できませんでした。分らないため、当時の先生に教えを請い続けたのが、これまでの道の「一歩」になってしまったのです。難解な本を読み続けた友人は、現在も企業の中核で活躍しています。彼ら・彼女らは、「一流の大学生」であったと思います。残念ながら「一流の大学生」でなかった私は、「敢えて自分を棚に上げて」でも、「一流大学生」である皆さんに申します。「若者よ、街へ出ず、一人孤独に読書せよ。」(あれっ、このフレーズ誰かの「パクリ」かな？)

以上



ゼミ紹介

〈井形ゼミ〉

担当教員

井形 浩治(いがた こうじ)



【研究テーマ】

「企業と社会」についての新たな諸問題の研究

《ゼミ生、川北さんに聞きました》

Q1. 「活動内容は？」

A 各ゼミ生の趣向や先生の興味があった事柄を、ディスカッションして議論が進んだところで先生が経営学などの視点から考察をしていただきます。

Q2. 「ゼミの雰囲気は？」

A めっちゃいいです(笑)みんな仲が良く、ともだちです。

Q3. 「ゼミで身についたことは？」

A ディスカッションなどをしているのでコミュニケーション力と話すスキルが身に付きました。

Q4. 「ゼミで取り組んでいることは？」

A 課外活動をしています。

Q5. 「井形先生ってどんな先生ですか？」

A 破天荒！？、ざっくばらんな先生です。



(左)井形ゼミの河北さん

〈池島ゼミ〉

担当教員

池島 真策(いけしま しんさく)



【研究テーマ】

「企業経営と法」

《ゼミ生、杉田さんに聞きました》

Q1. 「活動内容は？」

A 日経新聞の企業・経済関連の記事や、テキストの章ごとに課題が与えられ、毎回その部分についての考察を行いゼミ生の前で発表を行います。その後ゼミ生からの質疑応答の時間が与えられるのですが、かなり鋭い質問が来ることがあるので深く調べる必要がありますね(笑)

Q2 「ゼミで身についたことは？」

A プレゼンの能力や新聞を読む習慣もそうですが、日経新聞をじっくり読む機会が多いため企業・業界について知識が深まり、就職活動のために必要な知識はかなり身につくかと思います。

Q3 「課外活動は？」

A 学祭のときにじゃがバターの屋台をやりました。打ち上げの飲み代がタダになるほど稼げたと思います(笑)

Q4 「先生はどんな人ですか」

A 授業ではまじめで厳しくご指導いただいておりますが、授業を離れるとフランクです。ピンクのシャツがよく似合うオシャレな先生です。

〈北村ゼミ〉

担当教員

北村 實 (きたむら みのる)



【研究テーマ】

「ビジネスと民法・契約法」

《ゼミ生近田正幸さんに聞きました》

Q1. 「普段の活動は？」

A. 「テキストを使って民法・契約法を知識としてインプットしたうえで、判例や過去の事例を調べ、ビジネスの中でどのように法が運営されているかを学びます」

Q2. 「ゼミで身についたことは？」

A. 「このゼミで学ぶ内容はかなり実践的なので、実務上のトラブルについてどのように対処していくか、どのようにリスクを減らすかというような社会に出たときにとても役に立つスキルが身についたと思います」

Q3. 「特に面白かったことは？」

A. 「法体系や、トラブルを処理する手続きなどが日本法とアメリカ法では大きく違う部分があってとても興味深かったです。外国企業と取引を行う際には必ず知っておかなければいけない知識ですね」

Q4. 「先生はどんな感じ？」

A. 「明るく元気なおじいちゃんといったところでしょうか (笑)」

Q5. 「ゼミの雰囲気は？」

A. 「先生と同じく明るく元気です。もちろんやる時はやりますよ (笑)」

〈木村ゼミ〉

担当教員

木村 俊郎 (きむら としろう)



【研究テーマ】

「民法学習のための基礎的アイテムの獲得と民事判例の検討」

《ゼミ生、村田耕輔さんに聞きました》

Q1. 「活動内容は？」

A. 二年生の時は判例やテキストを使って、法律を勉強する上で基礎的な知識を学びました。しかし最近ではアンパイアを置いて裁判風のディベートを行ったりすることが多いですね。この前のゼミでは夫婦別姓についてディベートを行いました。また、文章を書くテクニックや就職活動のコツなどについてのお話を聞くこともあります。

Q2. 「ゼミで身についたことは？」

A. 民法学習については言うまでもありませんが、毎週数分間の文章読解やメモ取りの訓練をするのでその種の技術は身についたかと思います。小技に見えますが、普段の講義を理解する効率も上がるため、ばかにならない技術だと思います。

Q3. 「ゼミ以外の活動はしていますか？」

A. 先生がお酒好きということもあり、よく学生主催の飲み会があります。年の暮れには全学年合同の忘年会もしました。また、学生のやる気があれば合宿が行われることもあります。

Q4. 「木村先生ってどんな先生ですか？」

A. ゼミに入る前は杓子定規的な気難しい先生というイメージがありましたが、実はとても明るく様々な面で豪快な先生です。飲み会の会計の時など先生の底無しの豪快さを見ることができます。

〈栗城ゼミ〉

担当教員

栗城 利明(くりき としあき)



【研究テーマ】

「企業の競争戦略と独占禁止法・知的財産法」

《ゼミ生、入江さんに聞きました》

Q1. 「活動内容は？」

A. 前半は先生のお話を踏まえつつ、経済法に関し、基礎知識や判例理解を行い、後半はゼミ生がグループごとに、担当テーマについて研究発表を行います。

Q2. 「ゼミの雰囲気は？」

A. 静かで学習するのに適したゼミだと思います。

Q3. 「ゼミで身についたことは？」

A. よく発表するのでプレゼン能力が身に付きましたね(笑)

Q4. 「ゼミで取り組んでいることは？」

A. 大学主催の奨学論文にゼミで挑戦しようと考えています。

Q5. 「栗城先生ってどんな先生ですか？」

A. 几帳面で、まじめな感じです。履修についてアドバイスをしてくれて思いやりを感じます。

栗城ゼミ 3 回生のみなさん



〈黒田ゼミ〉

担当教員

黒田 尚樹(くろだ なおき)



【研究テーマ】

「民法総論、契約法など」

《ゼミ生、安田さんに聞きました》

Q1. 「ゼミの普段の活動は？」

A. 一ヶ月毎にゼミナール内で班が作られ、その班毎に毎週法律に関する事案が課題として与えられます。各班は翌週のゼミナールの時間までに、サブゼミ(班毎の自主勉強会)を行い、その事案を解きます。そしてゼミナールの時間で各班毎に事案に対する発表を行い、討論を行います」

Q2. 「このゼミで身についたことはありますか」

A. 実際に裁判が行われた事案を扱うことも多く、民法の知識が向上したのではないかと思います。また、法的な論理的思考力や国語力が身に付いたと自負しております。

Q3. 「課外活動(飲み会や合宿、裁判所見学など)はありますか」

A. ゼミナールに入ったときに先生が主宰して先輩達も含めた親睦会を開いてくれました。その後も新年会などみんなで集まる機会は多いです。また、ゼミ合宿(昨年は長野県で信州大学と法律討論会や交流会、長野観光を行いました)や、他大学との法律討論会を行ったりしています。

Q4. 「ゼミの雰囲気はどうか」

A. ゼミナールの雰囲気はみんな仲が良く、明るく、アットホームな雰囲気です。

Q5. 「先生の人柄はどうか」

先生は非常に温和で馴染みやすい人柄で面白い人で

す。

私たちゼミ生とも非常に距離が近く、人気があります。

Q6.「このゼミのオススメの点を教えてください」

A.みんな仲が良くアットホームな雰囲気だということが一番お勧めな点です。

また、課題は大変なこともあります、法律に関する事案に何度も触れ、文を書き、討論をすることで、確実に法律の知識や論理的思考力、国語力が身につくと思います。



(左)黒田ゼミの安田さん



〈松田ゼミ〉

担当教員

松田 佳久(まつだ よしひさ)



【研究テーマ】

「家と土地の法律を学ぼう！！」

《ゼミ生、谷川 征大さんに聞きました》

Q1「ゼミの普段の活動は？」

A.「上新庄の町に出て、さまざまな不動産の運用方法などを調べ、グループごとに調べた内容を発表します。面白かったのは、グループごとに与えられたバーチャル空き家の間取りや家族構成などを考え、その家とその家族を将来に渡ってシミュレーションする授業ですね。やはり、ゼミ生ごとにマンション育ち or 一軒家育ちなどの育ちの違いによる固定概念の違いがあり、興味深かったです。また、不動産関係の資格をお持ちの方がゼミに来られて、実際の現場でのお話やいろいろな資格についてのミニ講義をされることもあります。

Q2「ゼミの雰囲気は？」

A.「2年生から4年生までのすべてのゼミ生で合同の飲み会やゼミ合宿をよくするので、学年を問わず皆が仲良く明るいゼミです。ちなみにゼミ合宿は三重県の長島スパランドなどにいきました。

Q3「ゼミの先生の人柄を動物に例えて説明してください」

A.「ウサちゃんですね(笑)」

松田先生はとても頭がよくてやさしい先生ですが、少しシャイでさびしがり屋なところがあるので(笑)」



(左) 松田ゼミの谷川さん

〈吉垣ゼミ〉

担当教員

吉垣 実(よしがき みのる)



【研究テーマ】

「民事訴訟判例演習 - 裁判所による民事紛争処理手
続きの種類・あり方について学ぶ - 」

《ゼミ生、村木 涼太・植松 貴士さんに聞きました》

Q1.活動内容は？

A. さまざまな事件ごとに、そこでの問題とされる法
律的な争点などについて、各自またはグループで調べ
授業ごとに発表するなどしています。

Q2.ゼミに入ってよかったことは？

A. 今まで読む機会のなかった、判例などの法律系の文
章を読むようになったことです。また、法律の授業を
通して、ロジカルな物の考え方が身に付きました。



(左)吉垣ゼミの村木さん

Q4.ゼミ以外での活動は？

A.先生がお酒好きなので飲み会をよくやります。学年
ごとに開催することが多いのですが、ゼミ全体の飲み
会を開催することもあります。

Q5.吉垣先生ってどんな先生ですか？

A. あまり法律家っぽくないほど熱血で、厳しく指導
していただいています(笑)



法がぶつかるビジネスシーン

第3回

「♪もしもし亀よ 亀さんよ♪」



船が飛行機を追い越す？

「兎と亀」の童話にある亀が兎を追い越す話は、ビジネスの世界でも同じようなことが起こっていて、「船」が「飛行機」を追い越すという事態が世界中で頻繁に起こっている。勿論、物理的に追い越すような話ではないがビジネスの世界では厄介な問題なのだ。

国際取引（貿易）では、商品の運送は主に貨物船による海上輸送によって行われている。時間でこそ航空機には敵わないものの大量輸送にかけては航空機の比ではない。

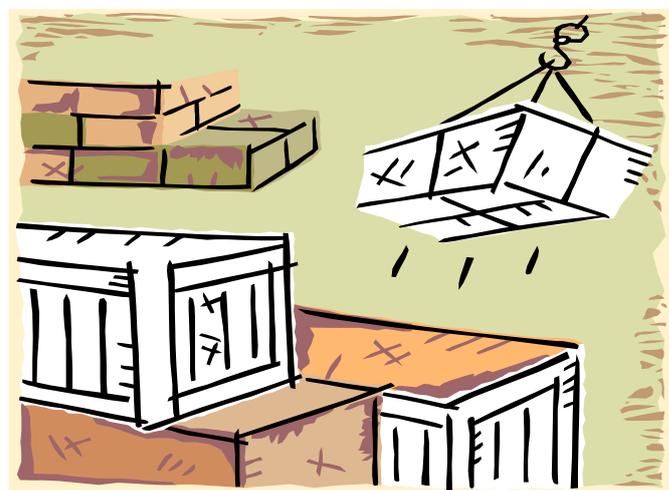


通常、貿易実務は、貨物船に輸出商品を積み込んだら、その海運会社よりその貨物引換証として「船荷証券 (Bill of Lading)」というものが発行される。輸出者はこれを輸入者へ送付して、輸入者は貨物船の到着を待って、到着次第この貨物引換証を提示して無事貨物を受け取ることができるという仕組みになっている。当然、貨物船の到着に先回りして貨物引換証は到着しておかなければならないので、その輸送は、貨物船よりも早い航空機に寄らざるを得ない。貨物を船に積み込んで即座に引換証を航空機に積み込めばほぼ

先回りして到着することはできるはずである。

ところが、貿易の世界では、遠く離れた売主と買主の間では、その代金支払いを確実に（物々交換＝同時履行）にするために通常は銀行を介在させている。つまり、貨物引換証は、積地港の海運会社→売主→売主の銀行→書類配送業者→航空機→書類配送業者→買主の銀行→買主というルートを経て、荷揚港の海運会社へ提示されることになる。これは、例えば、大阪港から米国ロサンゼルス港へという航海なら十分に間に合うが、極端な話で長崎港から上海港とか、博多港から釜山港という場合では、どんなに急いだところで、貨物船のほうが先についてしまうことは容易に想像できるはずだ。

このように国際海運の世界では、貨物船が既に荷揚港に到着しているにも拘らず、未だその引換証である船荷証券が到着していないという事態が頻繁に起こっているのである。船荷証券は有価証券であり、その紙切れ自体が貨物と同じ価値を持っていて単なる貨物引換証という効力だけではなく強力な力を持っている。従って、海運会社は必ずその真正な権利者に対して貨物を引き渡さなければ、後々大変な責任を追及されることになりかねないので、絶対にこの引換証と交換でない限り貨物を引き渡すことはできない。ところが貨物船が到着してもその引換証の提示がない。



じゃあ、どうすれば良いのか？

素直に考えると引換証が到着するまで港で待っていれば良いじゃないかということになるが、貨物船というのは小型といわれる1万トン以下のものでも建造費用は10億円ぐらいかかる。そして、その資金の大部分は借入金によっている。毎日毎日膨大な金利負担が掛かっている。また、停泊している間も、乗り組み船員は食事もすれば電気・水なども使う。当然その給料も支払わなければならない。しかも船は鉄の塊であるため、じっとしていれば錆びるしその耐用年数も限られている（法定償却期間も15年）。稼ぎもなかったじっと待っているということは一刻の猶予も許されないという事情があるのである。一方、港のほうも仕事が済んだ貨物船は早く岸壁を離れて欲しいし、次の接岸のため多くの貨物船が沖合いに順番待ちで列を成している。



それなら貨物を取敢えず岸壁に揚げてしまえばいいものだが、岸壁に貨物を放置することは許されない。結局は順番待ちの次の貨物の邪魔になるだけということには変わりはない。仮置きであってもその岸壁使用料は掛かる。それなら貨物を降ろさずにそのまま出港すればよいかもしれないが、それでは次の積荷を積むスペースがなくなってしまう。こうやって、貨物船はニッチモサッチモいかない事態に陥る。



「保証渡し」という商慣行

これを解決するために海運業界では「保証渡し」という慣行が古くから行われている。

つまり、引換証が未だ到着していないので、「万一、後日他の者から引換証の提示があった場合の全責任は買主が負う」という保証書を海運会社へ提出することにより、引換証なしで貨物を引き渡すということが行われる。ほとんど大部分は何の問題もなく無事に引渡しが行われて、多少遅れても引換証は海運会社へ提出されている。後日どこからか他人が引換証が持って現れて事件に発展するというものもない。しかし、時折、貨物を引き渡した後になって、引換証を持って貨物の引渡しを要求してくる者が出てくるのである。勿論、引換証つまり船荷証券は有価証券であり、これを提示されれば如何なる理由があっても海運会社は貨物の引渡しを拒むことは許されない。

何故そんなことになるのか？

問題は、単に船が飛行機を追い越すということではないからである。貨物代金が銀行間の決済によって支払われるということは、買主の銀行が一時買主に代わって売主に対して立替払いをするということにほかならない。従って、立替払いをした銀行は、買主からその立替金を支払ってもらわない限り、引換証を買主には渡さないということになる（勿論、担保や保証があればよいのであるが）。

買主はその資金繰りが苦しければ、取敢えずは貨物を引き取りたい、そしてこれを売却するなどして資金を回収し、これでもって銀行へ返済するというものも考えることになる。そうして、引換証は銀行の手元に既に到着しているにも関わらず、引換証は未到着ということにして「保証渡し」の手段で貨物を受け取ることになるのである。

銀行は、有価証券としての貨物同等の価値のある紙切れである船荷証券を担保にとっているのである。万一、買主から代金の支払いがなければ、この担保権を行使して貨物を取得しようとする。災難は海運会社である。貨物は既に買主に引き渡してしまっていて手元にはない。しかるに正式な船荷証券を提示されて貨物を要求する者が現れている。先に貨物を渡した買主は既に

倒産しているという事態である。

どうしようもない。

これが「船荷証券の危機」ともいわれ、海運・貿易の世界では永く問題になっている。

海運会社はこの対策として、買主に対してその責任を担保させるために単なる保証書ではなくて、その裏付けとして銀行による支払い保証を追加して出させるなどの対策も実施しているが、銀行保証となると保証料などの費用もかかるし、買主にいらぬ信用不安も呼び込みかねない。

世界的な対策としては、電子BLとして飛行機で運ぶのではなく、データ送信により即時に揚荷港に到着させる方法や、もはや船荷証券を使用せず単なる送り状で済ませるとか、EUのようにEU域内だけで通用するシステムを構築するなど対応は種々なされてきているが、やはり現実はそううまく機能していないようである

有価証券は、その代表格である株券がなくなり、また手形小切手も大手企業を中心にファクタリングなどの決済システムを利用することにより紙切れである手形小切手の授受を減少させている（実態は、手形に貼付する収入印紙の節約とも）。

到達点の想像もつかないIT技術の進歩は、いずれ有価証券という紙切れの存在を消し去ることになるかもしれない。それよりも電子マネーやクレジットカードにより、紙幣・貨幣も存在しなくなるかもしれない。既にその兆候は・・・・・・・・・・・・・・・・



大阪経済大学 経営学部 ビジネス法学科
東 裕一(あずまゆういち)

新聞の読み方入門

第5回

スキルとしての新聞の読み方（その2）

（5）こんなところにも目を

16) 地図や図表を読めるようになろう

（表現する時こうしたコンテンツは決定的に重要だし、理解を早め、役に立つ。地図が出ていたり図表が載せられたりするのそれはほど重要であったり、理解を手助けしようとせんがためである。地図などそれをみると世界のモザイクが見えてくる、そして一つにつながる。地図の載った記事だけ追いかけるのも楽しい。また画ける様になろう）

17) 広告や商品は楽しい

（企業が売らんかなと責め立てる広告こそ企業の最前線、そこには消費をくすぐる最も魅力的なものが凝縮されている。何より企業社会の人達と現代社会の創造性の現状を知ることができる。私だったらこんなふう、こんなものと思いを巡らせてほしい）

18) 数字を探してみよう

（生活のなかには無数の数字がちりばめられている。新聞の中から概数を拾い、その数字の意味を感じるようにしよう、仕事は求職者の50%以下だとか、数字を覚えると、バラバラの数字が一緒になって社会の諸問題をつなぎ、その実像を語り始めてくれる）

19) 新聞から自分の将来（仕事）を探そう

（何をしたらいいのか、どんな仕事に付けばいいのか、簡単には分からない。企業の記事は仕事の記事でもある。自分のしたい仕事を具体的にチェックし、面白そうな仕事・これから発展しそうな仕事を見つけ出す。新聞はその期待に応える情報誌です）

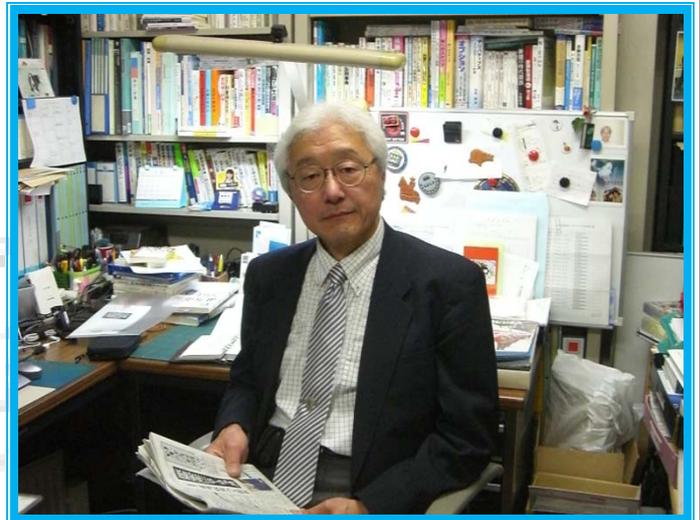
20) 経済や政治だけではない

（文化や芸術や教育や科学や書籍や写真やスポーツや読者意見や主張や社会運動、あらゆるジャンルの情報がある。義務で読むことなんかない。まずは

読みやすいもの、楽しいもの、すっと入ってくるものに目を向けてみよう）

21) 投資や金儲けの関連など知る必要はない

（すべてのニュースが投資や金儲けに通じる訳ではない。そうした情報は新聞を読む上で必ず知っていなければならない情報でもない。儲けることより損しない、だまされないための情報が必要。投資を外せば経済紙はスリムに）



（6）こんなこともしてみよう

22) ネットで読み比べてみよう

（「くらべる一面」のみならず、それ以外の全国紙なども。同じ記事でも強調点が全く違うことが少なからずある。特に政治的な問題や社会問題の理解などは新聞社によって異なってくる。それが見えるようになるのも楽しいが、ゆっくりやりましょう。何より新聞は最重要の情報ソース。すぐ「お気に入り」に登録しよう）

23) テレビやネットと相互確認を

（新聞だけとかテレビだけとか言うのではなく、その記事の入り口がどちらにあってもよいが、概して新聞記事の方が情報としてしっかりしている点からして、他のソースで手にいれた興味や情報を新聞で確認することが重要であろう。ネットは早いがそ

のニュースは新聞の早番であり、しかも第1パラだけである事が多い。やっぱり詳細と全体と続編は新聞でしょう)

24) 土日の新聞だけ読もう

(定期で購読すると高価だと考える人もいます。この2日間だけ新聞を手元に置こう。土日にコンビニで新聞を買おう、必ず読むものを探し、決めよう、毎週末の楽しみに、あなたのデータバンクに、朝日新聞は下宿生向けに4割弱オフの学割がある)



25) やっぱり好きで選ぼう

(車が好きで、車のことなら何でも知っていたい、環境が何となくこれからのキーワードだと感じるし、これ知っていれば何か徳をしそうだ、そんな記事を特別ターゲットにして新聞を読もう。好きは理解してもっと好きになれる)

26) 新聞を発想ノートに利用する

(読んでいておもしろい提案や意見、新しいサービスや商品などに出くわしたり、事件などの記事があれば、コメントをつけたり、提案をしたり、プラン化したりし、忘れないうちに新聞に書き込もう、後からノートに転記する。あなたの発想ノートを作ろう)

27) 記事のジャンル分け遊びをしよう

(経営経済を学んでいる以上、徐々にではあれ新しい概念やタームになれてきているはずである。特に科目登録などを経験して、この記事はどの分野に関連しているかなどを分類するのもいい勉強になる。

「今日の1面は金融ばかりだ！」などと。ただこれは中級のレベルでしょう)

28) 新聞記事を構成し自分のストーリーを

(自分の主張を立証するために必要な情報や環境・条件を、日々の新聞記事から集めよう。すなわち新聞記事の流れの中に自分なりのストーリーと

話を作って見よう。「今の世の中の動きはこうだ、それはこのような事件や問題によって明確だ」と)

29) 継続して読み継続して情報をファイルしよう

(あなただけの情報ファイルを作ろう。もし現実起こっている政治経済、社会の問題などネットで取れるとしても、その記事は新聞記事の要約的な転載であることが多い。重要だと判断した情報は信頼できる新聞記事で確認しファイル・保存しよう。マイ保存・マイファイルです)

(7) 要するにそうだったんだ

30) 新聞で時事問題の常識が身につく

(新聞には、毎日就活に不可欠な常識が掲載されています。それも何度も掲載されれば重要度が高く、今注目されているということでしょう。ニュース検定など新聞を毎日読んでいれば平均以上のクリヤーは楽々です。そして新聞は毎日頭を更新してくれる脳トレツールの役割を果たします)

31) 今や新聞が読めることが一つのステータス

(平均的な学生諸君にあって、全国紙を手にしても5分もとまない。読まないと言う決意の問題ではなく、読めないと言う現実の問題。目を通すのも「三面とスポーツと番組欄」では新聞である必要はない。新聞への愛着も、読んでいるという自覚や認識そして自信も、生まれません。新聞を読むあなたは確実に人と違ってくるし、違う事が話せるし考えられる。違う自分を認識しよう)

32) あおったり駆り立てたりする記事を信用するな

(これは中級編です。投資や商品紹介、政治などのよいしょ記事、特殊に思想的な見解などには注意しよう。新聞によって元々さまざまな思想傾向がある以上、新聞を読みながら自らの考えをチェックすることも大切である)



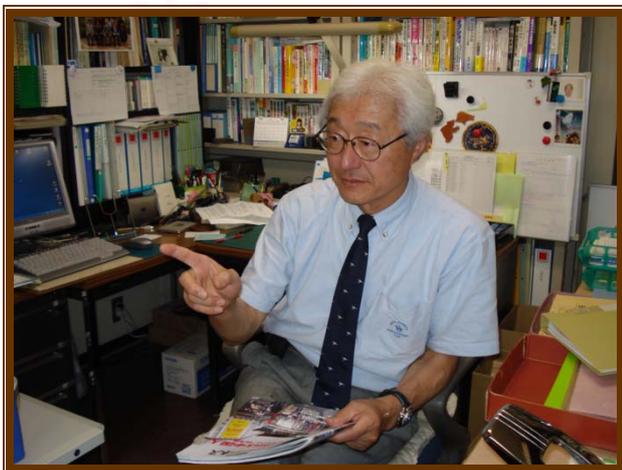
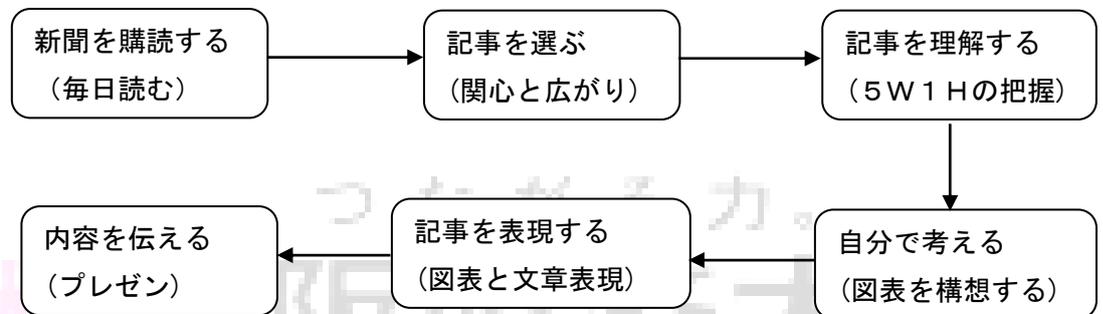
33) だまされたくなければ新聞を読め

(ネット上には未確認不確定の情報が満ちあふれている。あつと言う間に消えてしまう情報は人をだますためにも利用される。新聞の記事は残り、新聞社とその編集者は責任を問われる。新聞を読み続けておれば、ネット上の情報の真贋を確認することが可能になる。人の言うことに惑わされないために。もちろん新聞記事は絶対ではないですが)

(8) おわりに

34) 記事を図表化するとすっきり理解可能

(記事をフローチャートの形式などを用い流れ図で表現してみよう。記事は5W1Hを基礎として書かれています。まずはそれを探し、記事の構造を理解しよう。その過程で5W1Hやその重要な用語や概念を丸く囲み、それらを線や矢印でつなぎ、論理や発展の流れを明確にする。それで理解できたら今度はそれをにらんで考えてみよう。こうだという意見がまとめれば、それを中心に今度は人に伝えるための図表に整理したり、表現の資料を作ったりしよう。報告のチャンスがあればその図表を元にプレゼンしてみよう。文章よりもっと広がりある説明になるよ)



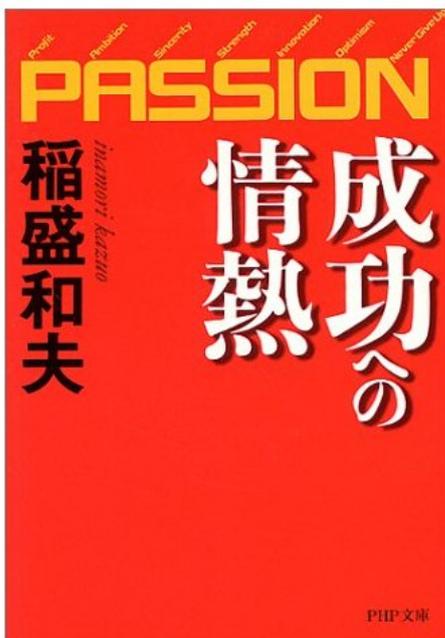
大阪経済大学 経営学部 経営学科
樋口 克次(ひぐち かつじ)

〈二宮正司先生退職の言葉〉

「知行合一」そして「考動」＝「行動」

私は、今年3月末をもって定年退職し、4月1日より特任教授として勤めています。大経大で21年、前任校も含めると延べ35年間の大学勤務になります。そんな長い経験の中で、「人間が育つとは如何なることか」を思索してきました。今回は普段から考えていることを少し紹介します。

私は、大学は学生が「生きる知恵」を育成する場所であると理解していますが、京セラ創業者の稲盛氏は「成功のための方程式」を下記のように定義しています(稲盛和夫『成功への情熱』PHP研究所2001)。



《出典、稲盛和夫 official site

<http://www.kyocera.co.jp/inamori/index.html>》

人生・仕事の成果＝考え方×熱意×能力

この方程式は、どちらかと言えばベテラン社会人対象で、哲学的・長期的視点で考えられています。特に「考え方」の要素は、多くの人生経験を積み重ねて得られる哲学的・倫理的・宗教的内容を包括しています。

そこで、この方程式のアイデアをお借りして、中・短期的視点から、未だ人生経験が浅い学生向けに組み立て直すと次のようになるでしょう。



稲盛 和夫 (いなもり かずお)

京セラ創業者 現名誉会長

KDDI 最高顧問

日本航空株式会社代表取締役会長

《出典、稲盛和夫 official site

<http://www.kyocera.co.jp/inamori/index.html>》

生きる知恵(社会人基礎力)＝知識×実践・経験×意欲
『広辞苑』によると、知恵とは「物事を思慮し、計画し、処理する力。物事の理を悟り、是非善悪を弁別する心の作用。」と定義され、また解説として「人生の指針となるような、人格と深く結びついている実践的な知識をいう。」とあります。社会人としての人生を歩む準備をしている学生にとっては、「社会人基礎力」と言えるでしょう。

右辺の項目は、自分自身で管理できる要素です。「知識」は世間で言う学力ですが、「知識×実践・経験」が本当の意味での学力です。これに「意欲」という精神的要素が加わって「知性」「感性」が育成されてくれば、「生きる知恵」となって「人間力」を形成することになります。これこそが大学の果たすべき教育目的であると考えます。この方程式では総ての要素は0点から100点の間で評価されますが、この方程式が「足し算」ではなく「掛け算」であることが重要です。

なぜなら、足し算の場合、何れかの要素がゼロであ

っても、残りの要素がゼロでなければ、方程式全体がプラスです。しかし掛け算の場合、例えば、どんなに豊富な「知識」や「実践・経験」があっても、「意欲」が少ないか・ゼロであれば、「生きる知恵」「人間力」がゼロ近くになることを含意しています。また、「知識」「実践・経験」「意欲」は我々自身が決定できるものなので、「生きる知恵」のほとんどが、われわれ自身に委ねられていることを意味しています。

何事にも「意欲」を持たなければ始まりませんが、これを前提にして「知識×実践・経験」について考えてみましょう。例えば英語を身に付ける場合、英単語を幾ら沢山知っていても、それだけでは話せません。実際に聞く・話すという実践・経験を積み重ねなければなりません。他方、実践・経験の積み重ねの中で初めて、自分に不足する英語知識が分かってきます。そして更に広がる英語知識が、レベルアップされた英会話を実現してくれるでしょう。このようなプロセスの繰り返しによって真の語学力が育成されるのです。つまり「知識」と「実践・経験＝行動」の繰り返し、即ち中国の明時代に王陽明が唱えた需学の思想「知行合一(ちこうごういつ)」です。この言葉の意味は、知と行とは表裏一体で、真に知ることは必ず実行を伴うということです。

パソナ代表南部靖之氏の表現を借りて敷衍すれば、「知識を付けることは行動することの始まりであり、行動することは付けた知識を完成させることである。行わなければ知っているとは言えない。知っていても行わないのは、まだ知らないのと同じである。」(朝日新聞 2011年4月10日)です。

日本では、小学校から大学まで「知識」習得が教育の中心で、「学力」とはこれを指しています。しかし、私たちが色々な課題を発見・解決するためには、自分で「考える」ことが必要ですが、机の前にただ座って「知識」を巡らすだけでは真に「考える」とは言えません。「考える」とは「行動」を伴う「考動」でなければなりません。課題発見・解決は「知行合一」によって初めて可能になるのです。本学出身者であるジャパンネットたかたの高田明社長は、自身の仕事に対する姿勢として「まず、やってみる。出来なかったら、変えてみればいい。それを続ければいい。」と言っています。

ながらる力。

大阪経済大学
OSAKA UNIVERSITY OF ECONOMICS



大阪経済大学 経営学部 ビジネス法科
特任教授 二宮 正司(にのみや しょうじ)

新任教員紹介



大阪経済大学 経営学部 経営学科
講師 栗田 聡子(くりた さとこ)

今年4月から専任講師として経営学部にて「メディア倫理」や「情報リテラシー」などを担当させていただいています。3月末まで北海道大学で研究員として勤務していたのですが、大経大はさすが大阪だけあって、先生方を含め、事務や警備の方々、学生さんも面白い方が多いですね。皆さんに親切にさせていただき、大変感謝しています。

大学卒業後はメディア業界でのバイト経験を生かして名古屋のテレビ局で娯楽番組の制作に従事しました。刺激も多く楽しい仕事だった反面、その局で女性ディレクターはほとんど皆無の時代でしたので、100名近い男性スタッフをまとめて番組を制作するにあたっては苦勞も経験しました。その後正式にメディアについて勉強したくなり、米国のインディアナ大学大学院テレコミュニケーション学科に入学してメディア心理学という比較的新しい分野で学ぶことになりました。インディアナ大学では4万人もの学生が学んでいて東京ドーム400個分もあるキャンパスは四季を通じて花と緑に囲まれています。アメリカの大学院はどこもアジアからの留学生が多く、競争意識の高いクラスメイトと競争して院生活をサバイバルするのは確かに大変です。ですが、スポーツ観戦や一流の芸術鑑賞がほとんど無料で毎晩開催されていますので、生活のバランスを取れば深刻なストレスなしで学位を修了する事ができます。語学を学ぶ目的であれば吸収が早い若い時期に留学するのが最適ですが、就職してからでも遅くありません。皆さんも海外で学んで一生の思い出と友達を作ってきてください。



大阪経済大学 経営学部 経営学科
講師 福田 圭三(ふくだ けいぞう)

私の専門は英文学と英語教育です。英文学では20世紀初頭のイギリス人作家 D.H. ロレンスを研究しています。ロレンスの作家としての活動は、1911年から亡くなる1930年までのおよそ19年であり、決して長い活動期間とは言えませんが、その間に非常に多くの小説、詩、紀行文、評論文、書簡を書き残しています。これらの膨大なテキストのうちで、現在は小説と紀行文を中心に、テキストの内部にあらわれる「他者表象」の在り方、「異文化理解」の方法について分析することに力を注いでいます。

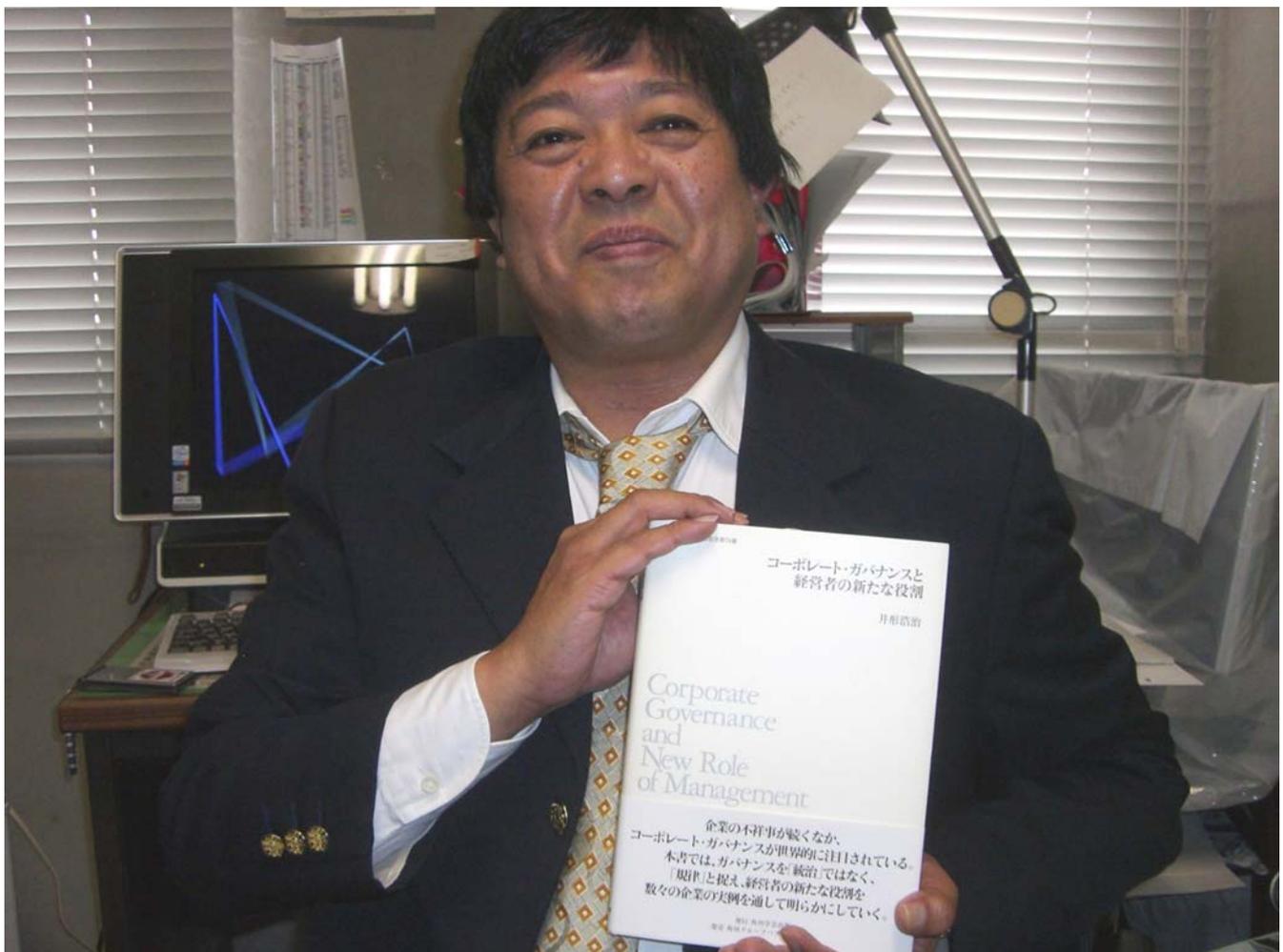
一方、英語教育では、同様に「異文化理解」をキーワードとして、特に異文化理解の在り方という視点から英語学習について考えることに興味を持っています。従来、英語学習とは異文化を理解することであると考えられてきましたが、異文化理解に至る〈プロセス〉については、十分な注意が払われてこなかったように思われます。多くの学習者は自身の英語嫌いを個人的な能力の問題と考えがちですが、実際には両言語の言語的距離の大きさが最大の原因となっています。英語への反発は異文化に遭遇した際に生じる一種の〈拒絶反応〉であり、それは外国語学習における必然的な一段階と言えます。漠然とある否定的な感情に一定の形を与えて、学習者が比較的スムーズに英語学習に向かうにはどうすればよいか、その方策について考えたいと思っています。

書籍紹介

井形浩治先生が5月28日に著書

『コーポレート・ガバナンスと経営者の新たな役割』

を出版されました!!



これまで「統治」と訳されてきたガバナンスを「規律」ととらえ、株式会社のガバナンスによる発展が経営者に「自律」的機能を付与したことを通して2

1世紀のコーポレート・ガバナンスを論じる。

《本書紹介文より》

学生寄稿小説

『夢想回廊』

S.K

例えば、それは『夢』だった。

起きたら覚める、そんな夢だったのよ。じゃあ、これはいつから『夢』だったのかしらね。目が覚めたときから？ 起きて、「ああ、これは夢なんだなあ」って思った時から？

じゃあ、逆に、起きてもそれが『夢』じゃないんだっていうんなら、あるいはそれは夢の延長になるのかしら。

『夢』の延長ってなんなんだろう。じゃあ、今、目を開けて見ている現実は一切何なんだろう。

現実が夢？ それとも、夢が現実？

きっと、そうじゃあない。夢だろうと現実だろうと、見ているのはわたし。だから、もしそれがどちらかなんて区別がついてしまったら、わたしは二人になる。

そんなの、いやだな。

だからわたしは、別れてしまったわたしを殺すのよ。

忘れてしまうという行為をして、きっとわたしは忘れてしまうの。

わたし自身を、わたし自信が忘れて殺すの。

もしわたしが夢から覚めて、それを『夢』じゃないって感じる事が出来たら、きっとそれは素敵なこと。

素敵なこと。それはきっと綺麗なこと。

起きて、それが現実なんだって思ったら、夢は『夢』じゃなくなるの。

夢がこちらに出てくるのよ。とっても素敵でしょう。

そんな、夢想。

思考の海から、わたしは意識を引きずり出す。とてつもなく倦怠な考えを巡らせていたような気がする。ああ、だったらそれはきっと『夢』

なのね。

忘れてしまおう。殺せばいい。そんなわたしなんて、わたしは知らない。

一時間もすれば、わたしはそんなことを考えたことすらも、すっかり忘れてしまうわ。

白いカーテンが風にゆれた。そとに見えるのは、大きな一本の木と、とおくの街並み。ビルが乱立していて、夜景がとてもきれいなもの。まるで、大きなひかりの木があるみたいなのよ。

ここに流れ込んでくる風は、都会の排気ガスのおいなんてふくまない、とても澄んだきれいな空気なの。胸いっぱい吸い込んだら、からだの中のおごれたものがあらわれていくようなのよ。とても気持ちがいいの。

今日も小鳥がいないわ。ぴー、ちちち。ぴー、ちちち。かわいらしい声をだして、毎日毎日、とてもうつくしいのよ。

わたしの世界は、毎日とてもたのしいの。それはきっと、たのしめる心を持っているわたしがたのしいと思っているから。だって、こんな景色、普通の人

が毎日見続けてたら、あきてしまうでしょう？

でもね。ふふ、わたしはちがうの。とってもたのしい。小鳥たちの小首をかしげるしぐさなんて、それだけで何時間でもおしゃべりできるくらいにかわいらしいわ。

たのしい時間は、すぐに過ぎ去ってってしまうのね。だから、気がついたら空は暗くなっていて、思わずびっくりしてしまったの。でも本当にふしぎだと思うわ。つまらない時間はとても遅く遅く進んでいくのに、どうしてたのしいとこんなに早く進んでしまうのかしら。鑑賞なんかだと、逆なのね。

だから今度は、夜景を楽しむことにするの。ひかりの木に、車のテールランプとかが合わさって、ひかりの蔓みたいでとてもきれいでしょ

う？

あら、あれはなににかしら。見上げると、とても大きな光がひかりの木のの上にあったの。

それはまるで、夜を照らす太陽のようで、あつという間に、お昼になったの。

そんな、夢想。

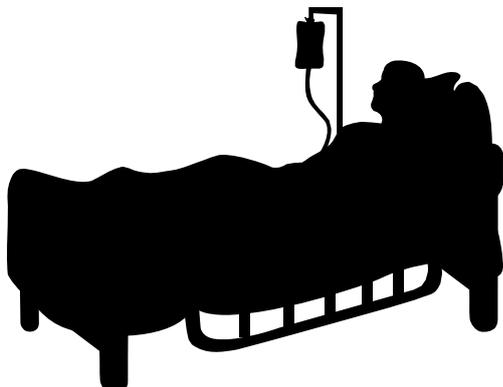
頭がくらくらした。目を覚ますと、薄暗い部屋に寝ていた。さっきまで、わたしはいつかいたんだらうか、と考えて、思考を切った。

どうせ、また『夢』だ。忘れてしまおう。『夢』を見ても、それが現実でないなら意味がない。だから、そんな記憶にさく容量を、わたしの脳みそは持ち合わせていない。

今日は一段と暑かった。昼間でも薄暗いこの場所は、日の光があまり届かない場所だから、まだ気温はマシだと思う。一步そとに出せば、それだけで汗が噴き出て、服がベタベタになってしまうでしょうね。だから、いつもは夜に行動するのよ。

なにを思ったのか、わたし自信もよくわからないのだけれど、この昼間からそとを散策することにした。昼間に出るのは久しぶりだわ。

ざくざくと砂をふむ音が、とても軽快で、知らないうちに小走りになってしまっていた。服は汗でぬれて、舞いあがった砂で、肌はザラザラになってしまっていた。



そんななんでもないことが、とても幸せなの。だって、感じるってことは生きてるってことでしょ？

だったら、この気持ち悪いことでさえ、生きているって証なのだわ。そう思えば、なにも嫌

なことなんてなくなる。ずっと毎日が、きつたのしいのだから。

見上げた太陽は、七色に輝いている。きらぎらと、だけどやさしく包み込んでくれるようなあたたさがあるのよ。太陽をまじめに見上げたことはなかったのだけれど、どうしてなかなか、月とくらべてなんと力強いことでしょう。

ああ、七色のあなたの光が、とてもまぶしいのよ。見えなくなるなんて、いやだわ。

そんな、夢想。

目を覚ますと、そこは白かった。

どこだったかしら、と首をかしげていると、ああ、と思いだしたわ。

わたしは確か、あまりの雪景色にうれしくなって、家を飛び出してきたのだわ。ほら、後ろを振り向いてみたら、わたしの足跡がしっかりと残っているのだもの。

さくさく、ぎゅっぎゅ。さくさく、ぎゅっぎゅ。

とつてもたのしいのよ。新雪をふむ音は、それだけでゆかいだわ。雪のうえでおどると、それがまるで楽団のように鳴って、とても軽快なのよ。

ほら、さくさく、ぎゅっぎゅ、って。

空を見上げるの。月光がとてもやさしくて、つめたくて、冬ということがよくわかるすどい夜ね。月を仰いで雪とおどるの。とても神秘的で、まるでわたしが雪のお姫様になったみたいなの。

はしゃぎすぎて、いつの間にか日がのぼってしまったのね。新雪の雪原は、踏みならした足跡と、それでできたでこぼとこで、きらきらと光ってうつくしいわ。かがやかしい太陽のひかりはやさしくて、それでいて情熱的なキスにも似ているの。

ああ、溶けてしまいそうなほど、月光をすった雪は、あなたに恋をしているのかもしれないわ。

そんな、夢想。

ごとん、という音で目が覚めた。

見まわしてみると、どうやらベッドから転げ落ちたようだった。頭を押さえてみれば、ずきずきと痛みが走った。こぶでも出来たのかしら。

ちょうど朝のようだった。いつもどおりに食パンをトースターで焼いて、バターをぬって食べるの。飲み物はその日の気分。今日はまだ寒いから、あたたかいコーヒーなんていいかもしれないわね。ポットで湯をわかし、インスタントのコーヒーを淹れた。

苦味が頭をついて、とても目が覚めるのだけれども、口の中にのこる後味はあまり好かないわ。朝と言うこともあるし、砂糖を多めにいれておくことにしましょう。

出かける支度をととのえたら、靴に履き替えていよいよ家を出るの。そとは桜が舞っている。マンションを出てすぐに、桜並木が広がっているのよ、これがとてもきれいで、この頃のたのしみのひとつなの。

おどるように駆けぬけて、向かう先はこの街を見下ろすことが出来る丘。そこには一軒のお屋敷と、大きな一本の木があるの。そこには誰も住んでいないみたいなんだけど、その家がわたしを呼ぶのよ。おいで、おいでって。

だからわたしは急ぐの。毎朝通る道を通して、街の景色を眺めながら、心をうきうきさせて、軽快な足取りでその丘の上のお屋敷まで歩いて行くの。

この瞬間が、とてもたまらないのよ。走るんじゃなくて、歩くことが大事なの。ゆっくりゆっくり、自分の中のおどる心を高まらせていくの。

それはまるで空を飛ぶような気分よ。ふわふわふわ。とっても気持ちがいいの。

桜が舞う街を抜けて丘にくと、風が自由に駆けぬけて行く広い世界が広がるのよ。街からたった数十分だっていうのに、こんなに都会とは色が違うなんて驚きだわ。

まるでこれは、そう『夢』みたいな世界なの。空だって飛べるような、わたしが風になれる、とてもすてきな『夢』。

ほら、一步飛び出せば風がわたしのからだをさらうの。からだにあたる風は、まるで飛んでいるような錯覚を生みだしてくれるのよ。ああでも、でもでも。

これが『夢』のようなものだとしたら、きっといつか覚めてしまうのだから。ならわたしはこれを『夢』だなんて思わないわ。だって、夢が夢でないなら、それはきっと現実に違いないもの。ああ、これが本物。すごいわ、素晴らしいわ。

わたし、きっと空だって飛べるのよ。一步を踏みだしてみれば、きっと風に乗って、空だって飛べるのよ。きっとそれは、とても気持ちのいいことなんでしょうね。

だって、あの小鳥たちと、おどれるのよ？
とてもとてもたのしそうじゃない。

ああ、なんて素晴らしい現実なのかしら。『夢』なんて、もう必要ないの。

現実を見て、夢を忘れるのは、きっと『夢』がわたしにいらぬものだからなのよ。

だからわたしは殺すのよ。別れてしまったもうひとりのわたしを、この心で、さようならと忘れて。

ふふ、もう一時間もすれば、きっとこんなことを考えていたことだって忘れてしまっているに違いないわ。

さあ、飛びましょう。きっとわたしは、飛べるはずだもの。

夢を忘れて、現実だけを見れば、きっとかなわない現実なんてないわ。

あら？

『ゆめ』ってなんだったかしら？

そう、それは例えば。

『夢』だった。

完

～編集後記～

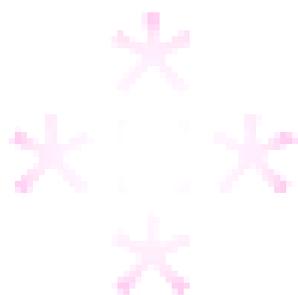


ビジネス法学科ジャーナルを手にとっていただきありがとうございます。製作では主にアが取り係を担当させていただきます。

手探りながらなんとか初めてのジャーナル編集作業を終えることができました。今回ご協力いただいた先生がた・学生の皆さんには感謝のしようがありません。

至らぬ点多々ありますが、力を尽くしますのでいましばらく生暖かい目で見守っていただきますよう どうぞよろしくお願いいたします。

村田



つながる力。

大阪経済大学
OSAKA UNIVERSITY OF ECONOMICS



今回の第9号から編集をすることになりました藤田です。本誌では、主にジャーナルの編集作業を中心に携わりました。私はこのような編集作業をしたことがなかったので、正直なところうまくできたかがすごく不安に感じています。

本誌は本来5月の頭に発行する予定でしたが、第9号の編集作業を始めたのがクラブやサークルが新入生勧誘を盛んに行っていた4月上旬から開始しましたが、ゼミ紹介の企画で、直接ゼミ生にインタビューをするということになり、かなりの時間がかかってしまいました。気が付けば、梅雨が終わろうとしています。本誌が完成したのは発行日の前日ということで、そこから大急ぎで印刷、製本作業をしてなんとかここまで、こぎつけました。

最後になりましたが、本誌の企画に協力してくださった先生方、各ゼミ生のみなさんありがとうございました。まだまだ至らないところがあると思いますが、これからも今まで以上に良いジャーナルを作れるように努力しますので、温かい目で見守っていただければ幸いです。

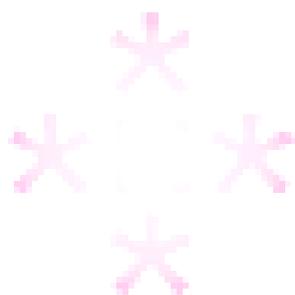
藤田



ビジネス法学科ジャーナル第9号

初版発行 平成23年6月15日

第3版 平成23年7月6日



つながる力。
大阪経済大学
OSAKA UNIVERSITY OF ECONOMICS
発行

経営・ビジネス法情報センター